研究助成報告論文

中国都市部における中年期男女の配偶者選択
――愛情と選択基準を中心に

于 建明
（清華大学社会学部 ポスドク研究員）

1. 研究目的と研究背景

本研究は、現代中国都市部に居住する、文化大革命期前後に結婚した結婚コーホート（以下、文革期結婚コーホートと略す）と、改革開放後に結婚した結婚コーホート（以下、開放後結婚コーホートと略す）の配偶者選択に焦点を当て、インタビュー調査により得た質的データに基づき、配偶者選択における愛情と選択基準の特質を探ることを目的とする。研究枠組みには社会時間―家族時間―個人時間の相互影響関係に関心をおくライフコース論を援用し、異なるコーホート・メンバーは異なる方法で成長していく（Riley 1998 = 2003）原理に基づいて、2つのコーホートの配偶者選択における異同を、「圧縮されたモダニティ」（Chang 2010）とも形容される建国後中国の社会変動との関連で考察していく。

1949年中華人民共和国建国までの伝統家族のもとでは、「伝宗接代」（跡継ぎを作ること）が婚姻と家庭の主な目的とされ、配偶者選択において厳格な「包办婚」（親の決め付け婚）が主流であった（袁 1991）。建国後、伝統家族の影響を残しながらも、すべての人民に労働義務が課され、男女平等が推進されてきたと同時に、男女関係に対する政治的要素の影響力も大きくなった。特に1966～1976年の文化大革命の影響で、配偶者選択も、夫婦関係も政治的な烙印を押されていた。配偶者選択において政治的身分[1)]が重要視され、男女関係がブルジョワ的とされタブーとされるようになった。しかし一方、80年代からの改革開放政策のもとで経済が発展してくるとともに、西洋諸国のライフスタイルが理想とされるようになってきた。その影響で、中国では生活様式が変わりつつあるとともに近代家族の愛情規範が影響力を持ち始め、配偶者選択において愛情が重視されるようになってくる。さらに、90年代からの市場経済の加速に伴って競争主義的な環境のもとで格差が拡大し個人主義的価値意識が強まってきた。個人主義意識の強化は配偶者選択において個人の自由や情緒性を重視するように影響を与えるだろう。中国独特な社会事変である文化大革命と中国家族の近代化と強く関連する改革開放の影響に焦点を当てる本研究では、文革期結婚コーホートと、開放後結婚コーホートを研究対象と設定した。

また、社会変動が個々人の結婚や家族についての意識に与える影響はある程度遅延されることを考慮して、文革期結婚コーホートに関しては、文化大革命中だけではなく、次の大きな社会事変――改革開放政策が実施される1980年までに結婚した人々に、開放後結婚コーホート関しては、1984年の都市企業体制改革の後に結婚した人々に設定した。激しい社会変動とともに自分の人生を歩んできた2つのコーホートは、結婚年の違いからくる社会時間的背景としての経済状況や就労状況、家族や男女関係に関する意識などは、配偶者選択に無視しえない差異をもたらすものと予測される。

2. 先行研究と分析視点

配偶者選択に関しては、その選択基準として、

財産やリネージを重視する結婚からロマンティック・ラブを重視する結婚へと(Shorter 1975 = 1987)、日本では、「イエ本位の結婚」から「個人本位の結婚」へと変化する(森岡・望月 1997)と指摘された。一方、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの浸透が「近代家族化」の指標の1つとされ、夫婦愛が相対的に希薄である日本(瀬地山 1996)では、60年代後半に恋愛結婚が見合い結婚を上回ったことが、日本の家族が「近代家族化」した証拠として扱われてきた。

中国では配偶者選択における変化が家族変化の重要な指標とされ、配偶者と知り合ったきっかけ、「愛情」がどれほど重要視されるかに焦点を当てるいくつかの量的調査の結果からその一端をみることができる。しかし一方、中国の配偶者選択における変化に関する捉え方は研究者の中で一致していない。

5都市調査[2]と7都市調査[3]では、配偶者と知り合ったきっかけを「包办婚」、「友人の紹介」、「本人同士」に分けて結婚年代別にみた結果、1985年と1993年の2時点とも、また1949年以降に結婚したいずれのグループとも「友人の紹介」が最も多く、1949年以降、配偶者選択において本人の意志が重視されるようになってきた一方、「本人同士」で知り合ったのはまだ一般的となっていなかったと指摘された。その原因は、①公共娯楽施設が発達しないことによる社交活動の少なさ、②「男女授受不親」[4]などの伝統的な観念の影響、③配偶者選択に対する慎重な態度、などにあると分析された(潘 1987; 瀋・楊 1995)。また、1998年に同じ調査内容で行われた5地点調査[5]の結果に対して、「自身のネットワークを通じて配偶者と出会い、当事者の自主性もかなり認められている」(松川 2004)、紹介する人が入るというのがまだ重要な形式である(楊・瀋 2000)という相矛盾する指摘がされている。

また、配偶者選択において「愛情」がどれほど重視されるかに関して、潘(1987)は家柄や身分のつりあいを重視する意識は残存していると同時に、相手の職業、学歴、収入、家族の状況などの条件を重視する結婚が多くあり、愛情に基づく結婚が盛んになりつつあるものの、まだ主流となっていないと指摘した。楊・瀋(2000)は、配偶者選択で現実的なものがより重要視され、90年代に入ってもロマンティック・ラブはまださほど重要視されていないことを指摘した。

李・徐(2004)は、配偶者選択において似ている条件をもって安定的な関係が作れることが重要視され、伝統的な資源交換モデルがまだ説明力を持っており、資源は目に見える収入や住宅を持っているかどうかのような資源から、仕事の将来性や予期される収入の上昇などのような潜在的あるいは予期される資源に傾斜する傾向があると指摘した。さらに、李(2008)は2000年の人口センサスデータの分析を通して、市場経済への移行にともなって、市場という確定性に欠けるプレッシャーのもとで配偶者選択において同質婚の傾向が強まる傾向があると指摘した。

以上の研究では、配偶者と知り合ったきっかけおよび選択基準に焦点が当てられた。ただし、紹介する人を通して知り合った結婚でも恋愛感情をもって結婚する夫婦もいれば、本人同士で知り合っても現実的な考慮に基づいて結婚した人もいると考えられる。したがって、本研究では、まず配偶者と知り合ったきっかけに焦点を当て、「紹介で知り合った結婚」を「紹介結婚」、「本人同士で知り合った結婚」を「自主結婚」と呼び、調査対象者の配偶者選択をカテゴリー化する。さらに、それぞれのカテゴリーについては選択基準として何が重視されたかに注目し、異なる社会時間的背景のもとでの2つのコーホートの異同について考察する。

3. 調査概要

(1)調査対象と分析対象選定の方法

ここでは、筆者が中国の社会変動と都市部の中年期男女の夫婦関係というテーマで、中国北京市に在住する、2007～2008年の調査時点で35～65歳の有配偶の中年期男女を対象に行ったインタビュー調査から、本研究の課題に即した30人(男性13人、女性17人)のデータを分析対象とする。出生年は1972年、結婚年は1998年より前の人々

であった[6]。また、インタビューは回顧で尋ねたため、調査対象者の語りは、あくまでも現在の立場からの発言でバイアスが発生しやすいことは留意すべきである。なお、分析では回顧調査の影響であると識別できるときに、なぜ調査時点の立場でその答えをしたのかについても触れておく。

調査対象者の選定にあたっては、年齢、家族構成、職業などの基本属性に偏りを生じないよう配慮しながら、知人に紹介してもらう、居民委員会[7]に紹介を依頼するなどのスノーボールサンプリングの方法を採った。ただし、経済階層はほぼ全員が中間層に位置づけられ、現在北京に居住している人に限定されている点で偏りが生じている。

(2) 調査時期

2007年1～2月、5～6月、2008年1月、8月、11月。また、一部の事例につき2010年12月、2011年7月に追跡調査を行った[8]。

(3) 調査方法と調査内容

質問紙に基づく半構造化インタビューを行った。質問項目を設定したが、調査対象者にできるだけ自由に語ってもらった。

調査内容は、年齢、学歴、職業キャリア、家族構成、結婚年などの基本属性のほかに、家庭内役割分担の状況、配偶者選択の状況、結婚後の夫婦の情緒関係の状況および夫婦関係に対する主観的認識などが中心であった。配偶者選択に関しては、①夫 / 妻とどのように知り合ったのか。②夫 / 妻を結婚相手に選んだ理由は何か、が中心である。

(4) 分析対象者のプロフィール

分析対象30人の中で、紹介結婚は17人、自主結婚は13人であった。コーホート別にみると、文革期結婚コーホートの11人中、紹介結婚は10人、自主結婚は1人であり、開放後結婚コーホートの19人中、紹介結婚は7人、自主結婚は12人であった。そのプロフィールと配偶者選択に関する簡単な情報は図表-1に一覧する。事例番号の最初のアルファベットは性別を示しており、Wは女性、Mは男性である。また、2つ目のアルファベットは事例のIDであり、文革期結婚コーホートを小文字で、開放後結婚コーホートを大文字で示している。

4. 事例の分析

(1) 文革期結婚コーホート

(a) 紹介結婚の事例

【選択の余地が乏しい結婚】

結婚に踏み切る契機が、本人もしくは配偶者になる人の偶然性も含む生活状況のなかにあったことを強調した事例は、文革期結婚コーホートでは2人が該当する。

1966年に雲南省に下郷[9]され、1972年に北京に戻ったWgさんは、紹介で夫と知り合い、短い付き合いで結婚した。「当時私はもう26歳、彼は30歳で。文革のときに彼は出身のことで衝撃を受けてたせいかな、職場では人と距離をおいて(結婚できなかった)」。文化大革命への遭遇がWgさんと彼女の夫の結婚年齢を遅らせていたため、互いに深く知りあう間もなく、紹介による結婚に踏み切ることにつながった。

4歳で父親を亡くし、叔父の手で育てられたM1さんは、1962年に有名大学に進学し、クラスメートの女性と互いに恋愛感情を抱いたが、その時代は「恋愛は恥ずかしいことで、周りに笑われるからお互いに告白はしなかった」。大学卒業後、国の呼びかけにより軍隊で2年間の訓練を受けることになったが、その前に結婚したほうがよいという叔父の意見で、紹介で知り合った妻と1カ月で結婚した。この事例から、当時の男女関係をタブーとする社会規範が恋愛結婚の可能性を制限したことが分かる。

当事者の自主的選択の余地が乏しい点では以上の2事例と類似しているものの、厳しい生活条件と、一定の年齢になったら結婚することを当然視する社会規範の影響のもと配偶者選択の理由や基準を明確に語らなかった人も2事例ある。

東北地方に下郷されたWcさんは、紹介で北京の軍隊で服役している夫と知り合った。遠く離れていたので、結婚まで3回しか会えず、主に手紙でコミュニケーションを図った。この状況に対し

て、Wc さんは「夫を選んだときはロマンティック（な感情）とかではなく、一緒に生活するだけ」と語った。

研究所所属の試験用工場で働いた Mj さんは、北京近郊の農村の小学校で働いた妻と紹介で知り合い、その年に結婚した。「結婚までに何かロマンティックなことはあったのですか」という質問に対して、「なかった。（結婚のときも）特別の日も選ばなかった。土曜日に何人かの同僚を呼んで、飴を配ってちょっと騒いで、これで終わり」と答えた。結婚してからも 10 年近く両地分居[10]していた。

【本人の選択が強く作用した結婚】

同じく紹介結婚とはいえ、本人の選択が配偶者選択により強く作用する場合もある。その選択基準としては、一般に配偶者選択や夫婦関係を左右する「資源」とみなされる、学歴、職業、収入などが挙げられた。

Wa さんはこのような資源重視の代表的な事例である。もともと中学校の物理教師であった Wa さんは、結婚適齢期になってから、何人か男性を紹介してもらったが、ほとんどが労働者で、「その時代は労働者の地位が高かったけれど、私は好きじゃなかったの。ちゃんと教育を受けた人のほうがいいと思って」と、断ってきた。その後、同僚が夫を紹介し、「科学院で研究職って聞いて、この仕事ならいいと思った。1 回会って印象良かったの。実は背が低いけれど、初対面の時は全然気付かなかった。結局すごく早いうちにこの人でいいと決めた」という。

高校教師として勤めてきた Wb さんの場合、「当時彼は鉄道で働いていたから、給料は私より高かったの。労働者だったけど、現在教師という仕事ができてる以上、肉体労働しかできない人間じゃないでしょう？」という。

幼いときに母親を亡くした Mn さんは、紹介で知り合った妻は「温厚な人で感じがよかった」と妻の性格に惹かれた。

以上の事例とは異なり、We さんや Mm さんは、政治的身分のつりあいを重視しており、当時の中国に特有な配偶者選択の基準が示された。

河南省で幹部の身分を取得して一貫してキャリアアップを求めてきた We さんは、「周りに私と同じレベルの男性がいなかった」。北京の軍隊の幹部である夫と紹介で知り合い、「彼は軍人だったし、党員でもあった」ことでつりあいがとれていたと思い、離れ離れの 2 人は、手紙でコミュニケーションを図って結婚したという。結婚後 13 年間夫婦両地分居したが、キャリアを重視する We さんにとって問題ではなかった。

同様に Mm さんは、軍隊の管理職を務めていた当時、故郷で婚約した人がいたが、その女性の出身は中農だと伝えられていたものが、後で富農[11]であることが分かり、将来の昇進に不利だと思って婚約を解消した。その後、紹介で劇団の役者であった妻と知りあい、親も職場の上司も役者という職業が軍人にふさわしくないことを理由に反対していたが、美人であった妻に惹かれて、自分の強い意志で結婚した。この事例から、「富農」と「軍隊の幹部」、「役者」と「軍隊の幹部」が釣り合わないなど、当時は配偶者選択において政治的身分が重要視されたことが窺われる。

(b) 自主結婚の事例

「紹介結婚」と比べ、「自主結婚」の場合は、本人の選択が配偶者選択により強く作用し、選択基準として愛情がより重視されると思われる。しかし、文革期結婚コーホートの唯一の「自主結婚」の事例である Mi さんは、愛情などの情緒性より資源重視の結婚と同じく学歴、職業、収入におけるつりあいを強調した。

工場の管理職を務めてきた Mi さんは、知識青年[12]として工場に配置され同僚となった妻と恋愛結婚をした。「結婚相手として選択の範囲が狭かった。職場には未婚の女性がそもそも少なかったし、その中に小学校しか出てない人も。彼女たちは学歴がなかったけれど、一応知識青年なので。我々の時代、1 人の収入で家族を養うことができないから、農村出身で、仕事を持っていない人と結婚するのはだめだね」という語りから、恋愛感情に基づく自主結婚であっても、学歴や収入などを重視する意識は当時の低い生活レベルと関連していることがわかる。妻との恋愛過程に関して、「その時

図表-1 分析対象者概要一覧表

	事例番号	結婚年齢	結婚当時職業	結婚当時学歴	結婚年	結婚当時配偶者職業	出会いのきっかけ		付き合い期間	選択基準	情緒性発言の有無
文革期結婚コーホート	Wa	28	中学校教師	2年制大学	1980	研究所研究者	紹介	同僚紹介	1年足らずで結婚	仕事	なし
	Wb	27	高校教師	2年制大学	1979	鉄道会社労働者	紹介	本人先生紹介	1年近く	収入　潜在能力	情緒性否定
	Wc	27	小学校教師	高1	1977	軍人(兵士)	紹介	夫の同僚紹介	3回の面会で結婚	生活	情緒性否定
	We	27	県婦人連合会	高校卒業	1974	軍人(幹部)	紹介		離れ離れで2年近く付き合い	政治的身分	あり:仕事重視で夫と一致
	Wg	27	高校教師	高校卒業	1973	国有企業	紹介	友達の母親紹介	数カ月の「短い期間」	選択余地乏しい	なし
	Mi	29	企業(計画員)	中等専門学校	1974	企業労働者	自主	同僚同士	同僚になって3年間	学歴　収入　感情	あり
	Mj	24	研究所所属企業労働者	高校以下	1967	小学校教師	紹介		紹介された年に結婚	特に語られなかった	なし
	Mk	29	高校	中等専門学校	1971	中学校教師	紹介		紹介されてすぐ結婚	出身　学歴	なし
	Ml	26	軍隊訓練	4年制大学	1968	高校教師	紹介	クラスメート紹介	1カ月	選択余地乏しい(タイミング)	なし
	Mm	25	軍隊管理職	高校以下	1967	劇団役者	紹介	いとこ紹介	「妻と熟知していない」うちに結婚	政治的身分　容姿	あり:きれいで好き
	Mn	23	紡績工場労働者	高校以下	1965	国有企業労働者	紹介	同僚紹介	数カ月	性格	性格に触れた
開放後結婚コーホート	WA	26	北京市公務員	2年制大学	1998	国家公務員	紹介		2～3カ月	タイミング　住宅の有無	情緒性足りないことを強調
	WB	25	農村小学校教師	高校	1997	軍隊	紹介		離れ離れで5～6年間	恋愛感情　能力	あり(強い)
	WC	25	軍隊所属短大	4年制大学	1997	軍隊所属短大	自主	同僚同士	2年間	以心伝心の関係	あり(強い)
	WD	24	小学校教師	中等師範学校	1994	小学校教師	自主	同僚同士	3年以上	愛情　成長環境	あり
	WF	29	公務員	2年制大学	1997	会社で営業	自主	同郷校友同士	2年近く	恋愛感情	あり
	WG	24	地方高校教師	中等師範学校	1990	高校教師	自主	クラスメート同士	2年半	コミュニケーション	あり
	WH	27	地方公務員	4年制大学	1991	国有企業	自主	高校クラスメート	離れ離れで2年間付き合い	学歴	現在の立場で情緒性否定
	WI	26	大学教師	修士	1990	大学事務職	自主	同僚同士	1年あまり	生活	なし
	WJ	26	企業付属小学校	中等専門学校	1990	国有企業	紹介		1年あまり	恋愛感情　容姿　仕事能力	あり(強い)
	WK	22	病院看護婦	中等専門学校	1986	医師	紹介		1年ぐらい	自然の成り行き	なし
	WL	26	国有企業	4年制大学	1988	国有企業	自主	校友同士	6年間	相手からの愛情	あり
	WM	25	企業職員	4年制大学	1986	国有企業	自主	高校クラスメート同士	高校3年から25歳まで「長年の付き合い」	恋愛感情　性格	あり
	MN	27	外資企業	2年制大学	1999	地方裁判所	自主	大学クラスメート同士	2年	恋愛感情	情緒性否定
	MO	26	国有企業	4年制大学	1997	国家公務員	紹介		半年	普通に	なし
	MP	28	国有企業	4年制大学	1997	国有企業	自主	同僚同士	1年ぐらい	親孝行という性格	なし
	MQ	21	地方高校教師	4年制大学	1990	高校教師	自主	同僚同士	2カ月足らず	周りの状況に左右	情緒性否定
	MR	24	地方企業職員	4年制大学	1991	地方企業職員	自主	同僚同士	2年	恋愛感情	あり
	MT	30	工場の事務職	2年制大学	1996	国有企業	紹介		半年	結婚適齢期	なし
	MV	26	軍隊	中等専門学校	1988	企業事務関係	紹介		1年半	選択余地乏しい	なし

注: 付き合い期間・選択基準については、できるだけ調査対象者の語りで書いた

代ロマンティックなんかありえないよ。みんな保守的で、関係が確定するまでに周りに知られてはいけないから、好きとも言えなかったし」と語り、男女関係はタブーである当時の社会規範が窺われる。

(2)開放後結婚コーホート

(a)紹介結婚の事例

【選択の余地が乏しい結婚】

開放後結婚コーホートでは、文革期結婚コーホートと同じく、結婚に踏み切る契機が本人もしくは配偶者になる人の偶然性も含む生活状況のなかにあったことを強調したのは、3事例であった。

軍隊で働いていたMVさんは、紹介で知り合った妻との結婚を決めた理由は、軍隊所属の中専を卒業した彼には、軍隊の推薦で短期大学に行くチャンスがあったが、2年間待たなければならなかった。「年齢などを考えて、待つ2年の間に結婚しようと決めた。紹介で彼女と知り合って、ちょうどいいなと思って結婚した。そのときは自分の計画通りにさえできれば、仕事さえあればいいと思って、まあ、青二才だったね」と語り、妻の期待通りに昇進できなかったことで現在の夫婦関係がコンフリクト状態になっていることが当時の自分の選択を否定的に評価した理由であるかもしれない。

北京市公務員であったWAさんは、7歳年上の政府機関に勤めている夫と紹介で知り合った2～3カ月後、夫の職場で既婚者を対象とする住宅分配があり、婚姻届を出したら住宅を配給されることになった。「(夫から)『結婚してくれる？』と聞かれて、その関係じゃなかったけれど、冒険だがチャンスでもあると考えた末に(結婚すると)決心した。今考えれば、もう少し熟慮して結論を出してたらね。短い付き合いで性格も価値観も分からなくて」と、MVさんと同じく、価値観の違いで現在夫婦関係がコンフリクト状態にあるもとで当時の自分の選択を否定的に評価した。

現在自分で会社経営をしているMTさんは、妻と結婚しようと思った理由について、「別に」と答え、ちょっとためらった後、「率直に言えば、もう結婚すべきだと思っていたのが大きかったかな」と答え、同じように結婚適齢期というタイミングが強く作用したようだ。

ライフコース上のタイミングが配偶者選択の契機となった以上の3事例に対し、文革期結婚コーホートと同様に、生活上の必要から結婚することは当然とみなし、配偶者選択の理由や基準を明確に語らなかった事例が開放後結婚コーホートにも2事例ある。

MOさんは、妻と紹介で知り合い半年で結婚した。結婚までの経緯について「普通に」としか語らなかった。似たようにWKさんは「自然の成り行き」と答えた。

【選択が重視された事例】

同じく紹介結婚とはいえ、本人の選択が配偶者選択により強く作用する場合もある。文革期結婚コーホートでは選択基準として愛情などの感情を重視する事例はみられなかったが、開放後結婚コーホートでは2事例あった。

WJさんは、国有企業の付属小学校で働いたとき同じ企業の職員である夫と紹介で知り合い結婚した。「紹介だけど(彼は)私にほれてたの。彼は格好よかったし、その年齢にしては有能で結構昇進したほうで。紹介だけど心が通じてて、恋愛のときからべったりで」と、恋愛感情を持って結婚したようだ。加えて、容姿、仕事の能力などを重視していた意識も読み取れる。

かつて山東省の農村で小学校教師をしていたWBさんは、同郷で北京の軍隊で働いていた夫と紹介で知り合い、離れ離れの状態で5～6年間付き合って結婚した。「その間に(私を)追い求める人が多かったけれど、心は動かされなかった。彼は才能のある人で、よく新聞に投稿して、掲載したら必ず送ってくれた。誇りに思ってて、お金をもらうよりもうれしかったの」という語りから、夫を選択した際に情緒性を重視していたことが分かる。

(b)自主結婚の事例

自主結婚である12人の中で、配偶者と同僚であった人は7人、クラスメートや学校の先輩、後輩であった人は5人であり、全員配偶者と共通の場を持っており、配偶者選択は空間的に制限され

ていることがいえる。

【選択の余地が乏しい結婚】

本人同士で知り合って結婚まで発展する「自主結婚」の場合、本人の選択が配偶者選択に強く作用すると思われるが、MQ さん、WH さんの 2 事例は紹介結婚か恋愛結婚かと聞かれたときに 2 人とも恋愛結婚だと答えた。ただし、後の語りから、それは単に自分で知り合ったという意味であり、愛情を持って結婚したわけではないことが分かった。

現在、北京の高校教師である MQ さんは、当時まだ学生である女性を愛していたが、彼の両親は夫婦関係に問題があって、彼に早い結婚を望んでいた。その結果同僚で自分のことが好きだった妻と 2 カ月の付き合いで結婚し、その後よく離婚も考えていた。彼の場合、愛情を重視していたが、周りの状況に左右されて、愛情のないまま結婚をした。

WH さんは、夫とは高校のクラスメートで、同じ都市の大学に進学したが、恋愛関係ではなかった。大学進学が珍しい時代だったので、2 人が結婚するのは当たり前のように周りに思われていた。大学を卒業して夫は北京の大学院に進学し、WH さんは故郷で就職した。1988 年に両地分居のままで結婚した。6 年後北京で一緒に生活するようになってから、夫婦の不一致が多く、調査時は離婚の寸前という状態である。この状態に対して、「(夫婦の問題を)うまく解決できた人には夫婦お互いに愛している前提があったらしいけど、我々にはなかったね」。結婚を決めた当時は学歴におけるつりあいを重視し、選択の余地が乏しかった。現在はコンフリクト状態であるがゆえに、配偶者選択では愛情が重要であると再認識している。

【選択が重視された結婚】

自主結婚の場合は本人の選択が配偶者選択に強く作用し、その選択基準として愛情がより重視される傾向にあるのではないかと推測される。開放後結婚コーホートではこれに当たる事例は 6 人いた。ただし、愛情重視の表現として「愛」や「ロマンティック」などの言葉が使われなかったことがこれらの事例の特徴である。

山東省にある軍隊所属の学校に勤めていたとき同僚であった夫と知り合い、恋愛結婚をした WC さんは、「若いとき両親のような夫婦関係がいいなと思ってたの。一挙手一投足から分かる。父がお酒を飲んで帰ってきたら、テーブルには必ずお茶が置いてあって。夫と知り合ってから、彼は純粋な人で、私のことを大事にしてくれそうで」と語り、以心伝心が可能な夫婦関係を理想としていたようだ。

会社経営者の MN さんの場合は、妻とは大学のクラスメートで、在学中に恋愛関係となった。卒業後は妻が故郷に、MN さんは北京の外資企業に就職した。離れ離れのままで結婚した。この結婚に愛情が重要な作用を及ぼしたと思われるが、新婚期から両地分居できたのはお互いに愛していたからなのかという質問に対しては、「恋愛だったけれど、それは愛情なのかといえば自分でも分からないね」という。

MR さんは妻とは同僚で、2 人とも独身寮に住んでいたとき恋愛関係となり、結婚した。愛しているから結婚したのかという質問に対しては、「妻に同じ質問をされたことがある。『分からないな』と答えたら、『愛情がなければなぜプロポーズしたの』と怒られた」というエピソードを語った。MN さんと同じように、実は情緒性を重視していたにもかかわらず、「愛情」という言葉を回避する傾向があるようだ。

他には、WF さんは夫とは「同じ都市の同じ学校に通っていた幼馴染みだったので、こちらで出会った時に感じがよかったの。ずっと会いたいと思い焦がれていた感じかな」と語った。夫とは高校 3 年から恋愛関係となり、24 歳で結婚した WM さんは、「彼と一緒にいると楽しくて」と夫の性格を重視していたようだ。夫とは中等師範学校でのクラスメートで、2 年半の付き合いで結婚した WG さんは、夫に決めた理由について、「その時代、みんな純粋で、収入や仕事などを考えることがなくて、話が合うから一緒に」とコミュニケーションを重視していたようだ。

以下の 2 事例は、愛情を重視しつつも、それと同程度に他の要因も重視した事例である。

小学校の教師である WD さんは、師範学校の先

輩である夫と同僚になって3年付き合って結婚した。この結婚に対して、「母は条件のもっといい人と結婚してほしかったの。住宅を持っている人とか」と反対していた。「(夫は)お金を持ってないけど、誠実な人で、私も頑固だから、母がしょうがなくて同意した」という。しかし、結婚した最初のときは「よく喧嘩したの。お互いに譲らなかったから。私は悔しく思ってた、都市の出身なのに農村の彼と結婚したなんて」と、配偶者選択の基準として愛情を重視していたが、出身におけるつりあいを重視する意識も潜在していたようだ。

また、現在外資系企業で働いているWLさんは配偶者の選択基準として愛情を重視していたとはいえ、個人主義的意識がより強く作用したという点でほかの事例と異なっている。彼女は校友である夫と6年間の恋愛の後に結婚した。結婚にとって「自分のことが好きな人でなきゃ」と相手からの愛情が重要だと語った。

以下の2事例は、本人の選択が配偶者選択に強く作用する自主結婚ではあるが、選択基準として愛情は挙げられなかった。

現在公務員として働いているWIさんは、大学教師、工事現場、企業の管理部門など多様な職業を経験してきた。同じ大学の職員であった夫との結婚に愛情があったかについて、「自然の成り行きかな、私は要求が低い、簡単な生活さえできれば。まあ、強いて言えば彼は性格が朗らで、いつも笑ってて元気そうで」と語った。

地方出身で地方の大学を出たMPさんは、転職を繰り返してきた。初就職のときの同僚である妻を選んだ理由について、「両親に親孝行できる人じゃなきゃと思ってた。(妻は)北京の出身だけど、割とおとなしくて良妻賢母になれそうで」と答えた。

5. 小括

本研究では、配偶者と知り合ったきっかけに焦点を当て、「紹介で知り合った結婚」を「紹介結婚」、「本人同士で知り合った結婚」を「自主結婚」と呼んで、調査対象者の配偶者選択をカテゴリー化し、さらにそれぞれの場合につき本人の選択がどの程度作用したか、その際の選択基準として何が重視されたかを中心に分析を進めてきた。分析の結果、以下の点が明らかとなった。

第1に、「紹介結婚」「自主結婚」の類型別にみると、文革期結婚コーホートの事例はほとんどすべてが「紹介結婚」であるのに対し、開放後結婚コーホートでは3分の2が「自主結婚」であり、配偶者選択の変化が推測される。ただし、配偶者選択は自主的になってきたとはいえ、本人同士で知り合ったという完全自主婚はまだ一般的とはなっていない(潘 1987)、90年代以降に結婚した人々の中でも、紹介する人が入る形式がいまだ重要で、配偶者選択で現実的なものがより重要視され、90年代に入ってもロマンティック・ラブはまださほど重要視されていない(楊・瀋 2000)などの指摘と符合して、開放後結婚コーホートにおいてもなお紹介結婚が廃れてはいないことが確認された。

また、両コーホートともに、本人の選択が強く作用する自主結婚の場合でも、その選択基準として恋愛感情ではなく、より現実的な条件が重視された事例が多くあった。このことから、中国における恋愛結婚は、「結婚の相手を選ぶにあたって、個人の幸福や自己陶冶が財産やリネージに優先するようになる」(Shorter 1975 = 1987)という近代家族の愛情規範とは一定の距離を持っていることが分かる。また、選択基準として愛情を重視する結婚でも、「愛」や「ロマンティック」などの表現はほとんど用いられず、この点に感情を必ずしも言葉で表さないという中国の文化的特性が表れているといえる。

なお、同じく「紹介結婚」でも、両コーホートではその内実が変わってきたことも確認された。文革期結婚コーホートでは、離れ離れの状態で紹介されて何回かの面会だけで結婚した事例が何事例かあったが、そのような結婚は開放後結婚コーホートでは姿を消していた。

第2に、2つのコーホートとも、配偶者選択における選択基準として、個人や家族のおかれた当時の生活状況や諸条件のつりあいを重視する事例が多くを占めた。このような傾向は紹介結婚の場合により明確にみられるが、自主結婚においても

無関係ではなかった。ただし、重視される条件にはコーホートによる違いがみられ、開放後結婚コーホートでは学歴、職業、収入などが中心であるに対して、文革期結婚コーホートでは他に政治的身分が重視されていた。ここに２つのコーホートがもっている社会時間的背景の違いをみることができる。また、文革期結婚コーホートの場合、配偶者選択において「愛情を重視していたか」という質問も不適切なほどに、当時の生活レベルの低さの影響、または男女関係がタブーとされていた当時の社会意識のもとで、男女の付き合いは結婚につながるべきだという社会規範の拘束力が強いことも推測される。

自主結婚でかつ恋愛結婚が半数を占める開放後結婚コーホートでは、その出会いは学校か職場であり、選択の余地が大きくなってきたとはいえ空間的な制約が大きく、彼らより若いコーホートのインターネットや携帯電話等を介した出会いとは状況が異なっている。また、自主結婚でもその選択基準として出身などの現実的条件を重視する意識が強い影響力をもっていることが読み取れた。それは伝統的な家柄のつりあいを重視する意識とともに、市場経済の導入による競争的な社会風潮のもとで強化された業績主義的な価値規範の影響だと推測される。日本の結婚における変動の方向性として、「イエ本位の結婚」から「個人本位の結婚」へ（森岡・望月 1997）と指摘され、「イエ本位の結婚」とは、結婚は家族（イエ）の繁栄と永続の手段とされ、家格・家柄のつりあいが重視される、「個人本位の結婚」とは、結婚そのものに価値が認められ、それ自体が目的とされ、個人の独立と自由が優先される（森岡・望月 1997）という説明に照準すれば、中国ではその中間段階に、一定の生活水準を保つことを最も重視するという意味での「生活本位の結婚」というカテゴリーを立てることができるかもしれない。つまり、結婚はより高い水準の生活ができるための手段とされ、結婚決定権は基本的に個人にあるにもかかわらず、個人の独立と自由より、結婚後の生活水準が配偶者選択の基準とされるというのが特徴である。また、コーホート別にみれば、文革期結婚コーホートでは当時の低い生活水準のもとで生活していくための手段として、開放後結婚コーホートでは競争的な社会環境の下で相対的な豊かさを実現するための手段として、相手の職業や収入、出身などが重視されたのである。開放後結婚コーホートにおいては、当事者の選択が作用する余地が広がっただけに、この「生活本位の結婚」はすでに、「個人本位の結婚」の様相もある程度帯びているものといえるだろう。

第３に、配偶者選択の基準をジェンダー視点からみた場合、文革期結婚コーホートでは男女間の意識の差異がみられなかったが、開放後結婚コーホートでは男性より女性が愛情の有無や程度を重視する傾向が確認された。また、男性は情緒性を重視したとしても、「愛情」という言葉を用いることを回避する傾向がみられた。男性は女性に比べ男女関係に関する伝統的な規範により強く拘束されていることや、性別役割における男女に対する期待が変化してきたことに由来すると推測される。

付記

本稿は、公益財団法人家計経済研究所の 2011 年度研究振興助成事業による助成を受けた研究成果である。

注

1）農民、労働者、幹部、手工業者などの出身のことを指す。また、共産党員であるかなども含まれる。
2）1985年に北京、上海、南京、天津、成都で行われた調査。
3）5都市調査の追跡調査として1993年に、北京、上海、成都、南京、広州、蘭州、ハルビンの7都市で行われた調査。
4）男女が物の授受で接触することがタブーである。
5）1998年に、7都市調査の中心メンバーに、石原邦雄を代表とする日本の家族研究者らを加え、上海、成都、青浦県（上海市）、太倉市（江蘇省）、宜賓県（四川省）の5地点で行われた調査。
6）さらなる若年層との比較もできれば、個人主義意識の影響が浮き彫りになるだろうが、これは今後の課題にさせてもらう。
7）都市の大衆自治管理組織で、一番末端の行政組織である。
8）このうち、公益財団法人家計経済研究所の2011年度研究振興助成事業に直接基づくのは、2011年7月の追跡調査である。
9）文化大革命中に毛沢東の「知識青年は農村へ行って、貧下中農の再教育を受ける必要はある」という指示のもとで行われた「上山下郷」運動の略称。
10）夫婦離れ離れで生活していること。形として日本の単身赴任と似ているが、80年代末までの両地分居は戸籍と強く関連していた。

11)当時、政治的身分としては農民は貧農、中農、富農、地主に分けられ、貧農は国家の主人、中農は団結できる人、富農と地主は鎮圧すべき対象とされていた。
12)文化大革命中の「上山下郷」運動より都市から農村に下放された若者。

文献

瀬地山角，1996,「主婦の比較社会学」『岩波講座現代社会学19〈家族〉の社会学』岩波書店，217-236.
松川昭子，2004,「婚姻とその時代的変遷――中華人民共和国成立以後」石原邦雄編『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版，50-75.
森岡清美・望月嵩, 1997,『新しい家族社会学 4訂版』培風館.
李煜，2008,「婚姻的教育匹配――50年来的変遷」『中国人口科学』2008年第3期.
李煜・徐安琪，2004,「择偶模式与性别偏好研究――西方理论和本土经验资料的解释」『青年研究』2004年第10期.
潘允康編，1987,『中国城市婚姻与家庭』山東人民出版社.
瀋崇麟・楊善華主編，1995,『当代中国城市家庭研究』中国社会科学出版社.
楊善華・瀋崇麟，2000,『城郷家庭――市場経済与非農化背景下的変遷』浙江人民出版社.
袁亜愚，1991,『中美城市現代的婚姻和家庭』四川大学出版社.
Chang Kyung-Sup, 2010, *South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition,* London: Routledge.
Riley, M. W., 1998, "A Life Course Approach: Autobiographical Notes," Janet Z. Giele & Glen H. Elder Jr. eds., *Methods of the Life Course Research: Qualitative and Quantitative Approaches,* Thousand Oaks: Sage Publications.（＝2003，正岡寛司・藤見純子訳「ライフコースの自伝的な覚え書き」『ライフコース研究の方法――質的ならびに量的なアプローチ』明石書店，79-116.）
Shorter, E., 1975, *The Making of the Modern Family,* New York: Basic Books.（＝1987，田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳『近代家族の形成』昭和堂.）

う・けんめい　中国・清華大学社会学部　ポスドク研究員。主な論文に、「中国都市部における中年期夫婦の家事分担――認識と評価」（『家族関係学』29, 2010）。家族社会学・都市社会学専攻。（ukenmei2004@yahoo.co.jp）